



第110回ワーキンググループ会議 (R5.4.27)

『滋賀の医療福祉に関する県民意識調査 結果』

●話題提供者

滋賀県医療福祉推進課

在宅医療福祉・認知症施策推進係

副主幹/保健師 高田 佳菜 さん



4月のワーキンググループ会議は、昨年度、滋賀県医療福祉推進課が実施した「滋賀の医療福祉に関する県民意識調査」の結果報告で、参加者は67名でした。

グループワークでは、調査結果の特徴や前回調査との相違点などを報告していただいたあと、それぞれの結果の背景について考えられることや意見を出し合いました。

【調査の目的】県民の医療福祉や在宅での介護・看取り等に関する幅広い分野の意識や意向を把握し、今後の医療福祉行政を推進するための基礎資料とする

【対象】県内在住の18歳以上の個人 3000人(回収率51.9%)



・高齢期に介護が必要になった場合に介護を受けたい場所として、「自宅等」と答えた人が減少傾向

(参加者より)

- ・施設に対するイメージが向上してきているのでは
- ・家族構成の変化や独居の増加も関係していると思う
- ・介護サービスなどの情報が周知され、選択肢が増えた
- ・年配者は家に愛着があって在宅を望む人が多く、若い世代は「見てくれる人の選択に任せる」という人が多いのではないかと

(参加者より)

- ・誰の目線で回答しているのかによって回答は変わると思う
- ・介護経験がないと自身でどこまでできるかわからないので、それによっても回答はかわるのではないかと
- ・自宅等で最期を迎えるのが実現困難な理由の一つに「家族の負担」がある。具体的に何が負担なのかを深く掘り下げ、解決する必要がある

- ・死期が迫っている状態で療養する場所として、一定期間「自宅等」を希望する人が約7割いる
- ・自宅で最期を迎えたいと考える人が約4割いるが、医療が必要になったときは実現困難だと約6割の人が考えている
- ・「わからない」が増加傾向

・介護保険サービスでは、特に在宅サービスの充実が期待されている

- ・「訪問診療」「訪問看護」「訪問介護」の認知度は比較的高いが、その他は低調傾向
- ・各サービス(特に、薬剤師・管理栄養士の訪問指導)について「知っている」人ほど、自宅で最期まで療養可能と回答している人が多い

(参加者より)

- ・病院を望む人がすごく増えているわけではなく、「わからない」という人が増えている。今決めなくても、最期が近づいてきたときにより良い選択ができるような知識を得ておけば良い
- ・「わからない」と回答している人は、知識があるのに選べないのか、それとも知識不足でわかっていないのか。それによって周知方法は変わる
- ・気持ちの変化に対応できるようなサービスの在り方や人材確保が必要では

(参加者より)

- ・施設や受けているサービスが、本当に自分に合っているのかを本人や家族が気付くのは難しい。医療で言うところのセカンドオピニオンのようなものがあれば良い
- ・望む看取りをするためには訪問看護の質を守ることが大事だと思う

- ・エンディングノートの認知度が前回調査から減少している
- ・エンディングノートの認知が深まるにつれて、延命治療を望まないと回答した割合が上昇している
- ・人生の最終段階の迎え方を話し合った経験がある割合が減少している

お知らせ

【次回ワーキンググループ会議】

○日時：令和5年5月25日(木) 18:30~20:00

○場所：滋賀県庁 新館7階大会議室(Web可)

○テーマ：

『夢や希望を語り合おう

～エンディングノートの広がりに向けて～』

○話題提供者：

守山市在宅医療・介護連携サポートセンター
保健師 浦西理絵さん

(参加者より)

- ・エンディングノートの認知度の減少は、コロナ禍で地域住民に情報提供する機会が減少したことも影響しているのでは
- ・人生の最期が近づくとエンディングの話はしづらく、事前に話すべき。家族を思うが故に、延命治療についてもあらかじめ話し合っておいた方が良い
- ・エンディングノートは「最期に向かう」というイメージがついてしまうと書いてもらいにくい。最期に向かうのではなく、未来に向かってどう生き抜くかというテーマでとらえ、「エンディング」というネーミングにしない方が良いのでは

☆6月以降の予定☆

ワーキンググループ会議：6/29(米原)、7/27、9/28、10/26、12/21、
1/25、2/22、3/21

総会・研修会：8/26(土) コラボしが21



医療福祉の地域創造会議 事務局

(滋賀県庁 医療福祉推進課内)

Tel 077-528-3529

e-mail info@chiikisouzoukaigi-s-higa.jp